



ひとに支えられて

横浜国立大学大学院工学府
システム統合工学専攻 材料設計工学コース
博士課程3年

池谷隼人

1. はじめに

私はリーマンショックで経済が混乱していた2009年に、自動車部品メーカーに入社しました。そこでは主に銅合金に関する研究開発に約3年間携わり、その後銅資源枯渇問題・軽量化・材料コストなどの観点から銅代替材料としてかねてより着目されていたアルミニウム合金の研究開発に取り組むことになりました。この研究開発のスタートと同時に、私は横浜国立大学大学院工学府システム統合工学専攻材料設計工学コース福富洋志教授のもとで研究を実施し工学博士の学位取得を目指すこととなり現在に至ります。この度、本稿を執筆する貴重な機会を頂きましたので、これまでの研究開発生活で自身が感じ、学んだことを僭越ながら述べていきます。

2. 社会人として

私が社会人としての研究開発業務を携わり、強く感じたのは「自らの意見・考えを人に伝えることの難しさ」と「目的・目標を明確にし、共有することの大切さ」です。当たり前ではありますが私たちの業務では研究開発結果や考察などを簡潔かつ、明瞭に伝えなければなりません。このコミュニケーション能力に関して私は、学生時代に学会発表等で鍛えられた経験から、人前で話すことに抵抗はなくむしろ自信を持っていました。しかし社会人1年生の自分には、思っていることすら上手く伝えることができませんでした。これは研究者としての経験不足はもちろんのこと、自らの知見の無さが原因であると考えました。当時の私には、すべての事象に対して自らが理解してから、人に理解してもらう原則が成り立っておらず、この出来事が社会人ドクターを志すモチベーションのひとつとなりました。

私はプロジェクト(研究)を達成するためには目標を明確にし、関係者全員と「共有」することが大前提であると考えます。プロジェクトを推進するにあたり多くの人と関わるため、この「共有」が達成への近道であり、目標だけでなく問

題や対策も「共有」することで目的が達成されると思います。企業での研究開発では、開発企画の立案から予算管理、研究開発の推進、問題発掘、問題解決に向けた対策立案、報告など様々なミッションがあり様々な人がそれぞれの役割をこなしていく必要があります。多くの時間をかけディスカッションし共通認識を持つことが「共有」であり、そしてそれは容易ではありません。そのためには双方の高いコミュニケーション能力により、関係者がWin-Winの関係を築き相乗効果を発揮することが必要であると考えます。

まだまだ未熟な私ですが、社会人として研究開発に従事する者として、強く感じたことについて述べさせて頂きました。今こうしてこのように執筆できるのも会社の同僚や上司、研究室の学生の支え、また福富洋志教授、岡安和人先生のご指導によるものであり、この素晴らしい方々との出会いにより今の私がいるものと感じております。

3. 社会人ドクターとして

ここで社会人ドクターとしての研究内容に少し触れさせて頂きます。私は社会人として約3年の経験を積み2012年10月に横浜国立大学大学院に入学し、アルミニウムに関する研究をしています。福富研究室では主に、金属材料の結晶組織制御および集合組織制御により材料が本来持つ性能を向上させる研究を行っており、私はアルミニウムの変形と破壊における微細組織の影響について研究しております。主にSEM-EBSDを用いて材料変形損傷解析や結晶方位、結晶粒界性格が変形・破壊に与える影響を調査しアルミニウム合金の研究開発の基礎となる理論構築を進めており、研究者として1から鍛えて頂いております。まず関連する研究論文調査から始め、自らの実験データとの比較や考察を繰り返す毎日であります。膨大な先行研究論文の整理・データ整理は地道な作業ではありますが、実験結果を積み重ねそこから導き出される結論は点と点を結んでいくようで、それらが1本の線となったときの喜びは計り知れないものがあります。ありきたりかもしれませんが、私の研究のモチベーションはこの線をどう引くかの探求心にあります。常に探求心を持ち続け、研究開発に従事するよう心がけていきます。

4. おわりに

私自身は技術者・研究者として、まだまだ未熟ではありますが工業界の一端を担う技術者として、精一杯努力し邁進していきます。最後に私を企業および大学の視点から研究開発を実施する機会を与えて下さいました社内関係者の皆様、福富洋志教授、また本稿への寄稿を薦めて下さいました長谷川誠准教授、福富研究室の皆様には大変お世話になり、この場をお借りして深く感謝致します。

(2015年8月3日受理)[doi:10.2320/materia.54.575]

(連絡先: 〒240-8501 横浜市保土ヶ谷区常盤台79-5)